様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０２４８９

研究課題名（和文）中国のアジア外交―歴史・理念・政策―

研究課題名（英文）Chinese Diplomacy for Asia : History, Philosophy and Policy

研究代表者
川島　真（Kawashima, Shin）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：９０３０１８６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中国のアジア外交を理念と政策の両面から、また清代／民国期／現代中国に亘る変容や連続性を踏まえて解明する。代表者川島が“Xi Jinping’s Diplomatic Philosophy and Vision for International Order”, Asia Pacific Review, Volume 26, などで中国の周辺外交を歴史的視座から論じ、分担者岡本が「近代東アジアの「主権」を再検討する」（『歴史学研究増刊号』989号）で主権をめぐる東アジアの比較研究など、19世紀、20世紀前・後半の理念と政策の実証研究を進め、変容や連続性を踏まえた議論を行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、時代ごとに分断されていた、中国のアジア外交の理念的側面と政策的側面を関連づけるとともに、同時に分断されていた清末、民国期、人民共和国期それぞれを関連付け、連続性と変容、比較的検討を行うことを目指している。これは中国外交史研究を統合的に再考察する試みであり、そうした分断を繕くことには学術的意義が存在すると考えられる。また、日本の中国外交史、外交研究は中国の対日政策を軸にしてきた面があり、それへの批判的検討にもなろう。他方、現在の中国の対外政策理念、とりわけアジア外交については「歴史」が参照されがちである。だが、参照される「歴史」と歴史それ自体の相違があることを本研究は描き出せるだろう。

研究成果の概要（英文）：This joint research project aims to explore continuity and transition of Chinese diplomacy for Asia, from the analysis of its philosophy and policy on each period, late Qing, Min-kuo and PRC China. Prof. Kawashima, project leader, publishes “Xi Jinping’s Diplomatic Philosophy and Vision for International Order: Continuity and Change from the Hu Jintao Era”, Asia Pacific Review, Volume 26. This article argues Chinese philosophy and vision on its diplomacy for neighborhood countries from the historical perspective. And Prof. Okamoto, one of the core members of this project, publishes “Re-consider on the concept of ‘sovereignty’ in modern East Asia: subject states and China”, Rekishigakukenkyu, No.989. This article explores comparative studies on the concept of ‘sovereignty’ in modern East Asia. Other members also advance the substantial researches on the continuity and transition of the philosophy and policies on Chinese diplomacy for Asia, in late Qing, Min-kuo, and PRC period.

研究分野：国際関係論

キーワード：周辺外交　外交史　国際関係史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中国のアジア外交については、日本では特に清代について重厚な先行研究がある。【清代の冊封朝貢／互市関係】歴史学の分野で、清代の冊封朝貢関係や互市関係について、フェアバンクや坂野正高の業績、また濱下武志の朝貢貿易論研究などにより、条約システムと朝貢システムの対峙という議論やアジアの秩序への西洋の参入という議論がなされた。だが、これらはやや理念的に過ぎ、実証研究が根本的にかけていた。それに対し、分担者の茂木敏夫は、19 世紀後半の清の対外関係の変容を従来の諸制度・理念の「近代的」再編だとした。これは茅海建の「天朝の崩潰」にも通じる。また分担者の岡本隆司は、同時期の清と朝鮮やベトナムと清との関係での「属国／自主」のあいだにおける揺らぎや解釈の多義性を見出した。これらは実証研究の不足を補い、伝統・近代の二分法を批判し、同時代的な複雑なコンテキストを描き出した。だが、これらをアジア史全体として、また中国の対外関係史の通史の中にいかに位置付けるのか、また理念と実態がいかに調整されたのかという点で、依然、不十分な状態にある。【清末から民国期】では、岡本が 20 世紀初頭に中国と隣接する国々（植民地）との間の領土交渉で、主権概念が中国に根付く過程を描いた。研究代表者の川島真は中国とタイ、朝鮮、アフガニスタン、ペルシャなどとの関係を描いているが、あくまでも主権国家間の関係が中心で、植民地となった地域との関係は依然研究史上の空白に近く、また川島は民国期での冊封朝貢関係をめぐる議論を整理したが、これと政策との関係性は十分に論じられていない。このほか、1940 年代前半の蔣介石のインド訪問などの研究もあるが、蔣のアジア外交と戦後の中国外交との関連性についての検討が不十分である。総じて、この時期の研究は実証研究が十分でなく、それだけに前後の時代との関連性も十分に研究されていない。【現代中国】は、建国初期のアジア・アフリカとの外交として、また台湾との承認争いの対象として、さらには昨今の地域協力や周辺外交として論じられてきた。日本では日中関係史の分野で特に多くの研究があるが、分担者の青山瑠妙はこれを中国のアジア外交として現代中国外交全体の中に位置付ける先駆的な業績を公刊した。だが、資料公開の限界もあり、中国とアジア諸国の外交史研究は二国間関係史の事例研究も圧倒的に不足している。英語では、中国とイラン関係史などで際立った業績があるが、依然空白が多く、対外観や理念の研究が先行している。中国でもこの問題点は意識されており、中国の冷戦史研究のセンターである華東師範大学に周辺外交研究センターが設けられ、日本でいう大型科研の下に近代以来の周辺諸国との関係史についてのプロジェクトが始められようとしている。

中国の外交史の最大の問題点は、①個別の実証研究の進展はあるものの、時代別に分断状況にあったこと、②概念（政策理念）と政策との関連性が十分に論じられてこなかったこと、に求められる。③そして何よりも実証研究が乏しいという根本的課題を抱えてきた。①については 19 世紀後半の研究と、20 世紀前半の研究の分断、そしてさらに現代中国と民国期以前の歴史の分断にあった。川島はこれを克服すべく、20 世紀中国の外交全体の連続性と変容を検討し、連続性としてある「主権重視」の傾向に注目し、「主権」を軸に通史的な共同研究をおこない、冊封朝貢が民国期などにいかに記憶化されたかを考察してきた。これらは先行研究での時代的分断を克服する試みであり、幾つかの著作を残すことができた。②については、19 世紀後半の冊封朝貢関係の変容、20 世紀前半の近代外交、20 世紀後半の社会主義国家としての外交、改革開放以後の外交など、概念や体制をもとに説明することが多く、川島は特に 20 世紀前半について理念と政策の双方、特に実証研究の蓄積に努めてきた。しかし、それは欧米列強や日本との関係が中心で、アジア諸国との関係は限定的であった。また、民国期のアジア観については幾つかの論考で論じたものの、それが政策といかに関わったのかという点は不十分だ。③そして、中国の外交史研究において、19 世紀後半の冊封朝貢関係の部分でアジア諸国との関係が議論されるが、それは欧米や日本を介在させた関係であり、またそれらが植民地になってからの関係についてはほとんど研究がなく、さらに 20 世紀前半からの独立国との関係は手薄だ。20 世紀後半も同様である。

２．研究の目的

中国の周辺諸国、アジア諸国との外交の歴史をいかに捉えるかということは、これまでも多く論じられてきた。だがそれは、冊封朝貢だったり、戦後のアジア・アフリカ外交であったりと、個々の時代状況の中で断片化され、王朝や社会主義の理念やスローガンと政策の実態の弁別が明確でなかったり、過度に理念に偏っていた。そこで、本研究は、中国とアジア諸国（東北アジア、東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジア）との関係を通史として俯瞰し、そこでの理念と現実の政策の双方を弁別し、先行研究において断片化していた事例研究を再整理しながら、時代と地域を厳選しながら実証研究をおこなうものである。冊封朝貢の時代から現在の周辺外交に至るまで、中国はアジア諸国をいかに位置づけ、いかに関わってきたのかということを明らかにする。これは日中関係を軸に中国外交を見ていた日本の研究史への批判的検討でもある。

また、中国をとりまく国際関係史研究の欠落、それも重要な論点の欠落を補い、さらに断片化された研究を紡ぎ合わせて再構築して、より大きな看取り図を示していく試みである。

３．研究の方法

(1) 本研究は、研究統括一名と、三名の研究分担者で遂行する（分担は表参照）。「理念と政策」、「時期区分を越えた連続性と変容」の二点に対応した研究班、また海外のアドバイザーや協力機関によって組織を形成、研究経過、成果はウェブサイトで公開する。代表者は、研究会などを通

じて通時的理解のための問題提起をおこない、また対外的な協力や研究会の組織を担当する。
　具体的には、第一に、これまでの「中国の対アジア外交」についての研究文献目録を作成し、その研究動向を今一度整理し直す。これは研究の空白、議論の経緯などをあらためて確認する作業になる。第二に、清代・民国・現代とそれぞれに分かれて、それぞれの時期のアジア外交の理念、位置付けについて明確にする。その上で、その理念がいかに形成され、誰に論じられていたかを示す。そうすることで、政策それ自体との相違点が見出せるようになる。第三に、その理念と実態の双方において研究史の空白、不十分な点を確認し、その部分に関する実証研究をおこなう。清末であれば、南アジア、西アジアとの関係は空白に近いし、民国期であれば植民地の関係が空白だ。現代中国では、社会主義やアジア・アフリカといったスローガンが先行しており、実態は明確でない。第四に、三つの時期を全体として見通すための会議を開催し、そこにおける連続性と変容点を整理する。第五に、アジア諸国の側から中国外交を見据えるために、第四と同じ時点、あるいはその後にアジア諸国の観点を取り入れた研究集会を開催する。第六にこれらの研究成果を、その進行に応じて適宜発信するとともに、最終的には書籍として公刊する。

統括		理念	政策
川島	19 世紀後半	茂木	岡本
	20 世紀前半	茂木・青山	岡本・川島
	20 世紀後半	青山	青山・川島

（2）実際には以下のように進めた。初年度は、研究組織を立ち上げ、本研究課題の意識共有をはかるとともに、史料収集を中心に、分担者がそれぞれの課題に取り組んだ。また、積極的に外部の研究者を招聘し、本科研の研究会である東アジア国際関係史研究会を 11 回開催した。第二年度は、対外政策や秩序形成を中心に、それぞれが課題に取り組んだほか、3 年間での事例研究の重複を避けるべく、異なる角度から検討することを意識した。新たな視点を取り入れるべく外部の研究者を招聘し、東アジア国際関係史研究会を 8 回開催した。最終年度には、「理念」「政策」について各時代の比較検討をおこない、これまでのそれぞれの研究成果から議論の集約をおこなった。東アジア国際関係史研究会は 6 回開催し、科研終了後の今後の取組みに向けて情報共有をはかった。

４．研究成果
（1）初年度は、課題の再確認、問題意識の共有をはかり、代表者の川島を中心に国内では東洋文庫、国外はスタンフォード大学フーバー研究所などで資料を閲覧・収集した。個別の研究では、茂木が「中国的秩序の理念」で近代中国のアジア外交「理念」を議論し、岡本は政策面から「中国「ギルド」論の系譜」を発表したほか、G・E・モリソン収集の極東関連文献に関する著作をまとめ上げた。青山は「Xi Jinping’s Political Gamble」などで現代中国外交の理念を詳らかにし、川島は政策面を「中国の対外政策目標と国際秩序観」で論じたほか、本課題を見通す「東亜国際政治史」を発表し、各担当に沿った成果をあげた。研究会は東アジア国際関係史研究会を 11 回開催した。第 23 回は李少軍「近代長江流域と日本の関係の研究」（2017/4/22）、第 24 回は陳冠仁「Beyond the Military」（6/1）、第 25 回は Andrea Revelant「The “First United Front” and the debate on “China's reddening”」（6/7）、第 26 回は座談会「中国の対外政策をめぐって」（7/11）、第 27 回は顔建発「台湾の対外関係と両岸関係」（7/13）、第 28 回はワークショップ「現代日中関係研究」（7/21）、第 29 回は劉国興「Cross Strait Relations: Challenges and Prospects」（10/11）、第 30 回は書評報告（鶴園裕基）・博士論文構想（杉浦康之）（12/12）、第 31 回は Kaoru Ueda「Unpacking the Study of Japanese Immigration」（12/20）、第 32 回は合評会「習近平政権を読む」（12/24）、第 33 回は許文堂「1964 年日華（台）断交危機」（2018/2/15）。
（2）第二年度は、引き続き代表者の川島真を中心に国内では東洋文庫など、国外はスタンフォード大学フーバー研究所などで資料を閲覧・収集した。個別の研究では、岡本隆司は「「東方問題」から「朝鮮問題」へ」という学会発表のほか、『世界史序説』『近代日本の中国観』などの著作をまとめ上げ、青山は「中国外交の世界戦略」や『中国の国際社会におけるプレゼンス』『Decoding the Rise of China: Taiwanese and Japanese Perspectives』など現代中国の理念にかかわる論考・著作を発表した。代表者の川島は中国の対外政策と秩序形成をテーマに各種学会発表をおこなったほか、「中国の第一次世界大戦参戦」「近代中国における『独立』」を発表するなど、それぞれが成果をあげた。研究会は東アジア国際関係史研究会を 8 回開催した。第 37 回は Pete Millwood「米中和解過程におけるトランスナショナル・ディプロマシー」（2018/4/5）、第 38 回は承紅磊「帝制将成，憲法何似？」（4/11）、第 39 回は上山由香里「戦後韓国史学史をみる視点」（6/11）、第 40 回は王文隆「台灣的轉型正義與資料公開」（7/5）、第 41 回は「近現代東アジアの社会・経済・国際関係」研究会と共催のワークショップをおこない（12/23）、第 42 回は Ghassan MOAZZIN「Networks of Capital: German Bankers and China’s Financial Internationalisation, 1885-1919」（2019/1/23）、第 43 回は李康民「韓国の日本認識、歴史と現在」（2/12）、第 44 回は「台湾における中国・台湾経済史研究の最前線」をテーマに羅士傑「地

方視角」陳家豪「台灣企業史研究動向及其展望」(2/9)。
(3) 最終年度は、これまで収集した資料の分析を重点的に行い、代表者の川島真を中心に国内では東洋文庫など、国外は台湾の国立台湾図書館、アメリカのスタンフォード大学フーバー研究所などで補足的に資料を閲覧・収集した。個別の研究では、茂木が「普遍と特殊――近現代東アジアにおける秩序構想の語り方」という学会発表、著作『アジアの歴史と文化――東アジア世界の構造変動の諸相とその歴史的淵源』の刊行をおこない、岡本が「近代東アジアの「主権」を再検討する――藩属と中国」という学会発表・論考発表で、主権をめぐる東アジアでの比較研究をおこなったほか、『腐敗と格差の中国史』などの著作をまとめ上げ、青山は「「強国外交」を進める中国と日本の役割」「Power and Motivation in China's Foreign Policy」など内外で論考を発表した。代表者の川島は、"Xi Jinping's Diplomatic Philosophy and Vision for International Order: Continuity and Change from the Hu Jintao Era", *Asia Pacific Review*, Volume 26, 2019.などで中国の周辺外交を、歴史的視座から論じ、国際学会・国内学会で精力的に発表をおこなったほか、編著の『中国の外交戦略と世界秩序―理念・政策・現地の視線』などを刊行した。最終年度に相応しい内容でそれぞれが成果をあげた。研究会は東アジア国際関係史研究会を 6 回開催した。第 45 回は任天豪「冷戰與臺灣：反共抗俄政策的概念與實踐」(2019/7/9)、第 46 回は徐浤馨「台湾から見たインド太平洋戦略」(8/2)、第 47 回は岡田将「通訳から見た中国」(司会兼ディスカッサント：川島真、ディスカッサント：小原凡司、佐橋亮、9/23)、第 48 回は「近代依頼の中国の教育改革座談会」としてポーランドから研究者を招き交流をおこなった。報告は Anna Wojciuk、Marta Tomczak「Japanese influence on Chinese educational reforms in late Qing and early Republic. State building and modernization inspired by foreign models」、孫安石「日本の留日学生史研究」、大澤肇「日本の中国教育史研究」(司会兼コメント：川島真、コメント：中村元哉、山崎直也、9/30)。第 49 回も座談会として「如何面向新時代中日関係」をテーマに、コメンテーター包霞琴、王広濤、川島真でおこなった (2020/1/14)。第 50 回は高勝文「日中両国はどう付き合うべきか―王正廷の「王道・覇道」論から考える―」(2/3) の報告があった。予定していた第 51 回 (2/29、黄仁姿) と第 52 回 (3/5、林孝庭) については、新型コロナウイルスの影響で報告者が来日できず、実現しなかった。
(4) 本研究を通じて、アジア外交をめぐる理念と政策との間の相互関係や緊張関係とともに、その時代ごとの変容や連続性についても一定程度の見通しを立てることができた。まず中国外交全般について理念と政策の関係性は以下のように理解できる。第一に、個々の時代に理念はあるものの、その理念と政策との距離を近づけようとする動きと、理念よりも現実が優先される動きも見られるものの、理念が優先されることはほとんど見られないということである。ただ、清朝が儀礼を強く重んじたり、また「天朝定制」を重視したりした点については、これが単に理念ではなく、現実としての意味も同時代人にあった点をどう考慮するかなどは今後の課題だ。第二に、理念が現実の政策に至る過程で理念が融通無碍に解釈されることもあるが、政策から理念へのフィードバックは不断に行われ、時に理念の変容をも促している面もあると言う点である。民国期の革命外交は実際には修約外交ではあったが、スローガンとしての革命外交は使われ続けた。また、1990 年代以降の韜光養晦などは解釈が変容し、最終的には新型国際関係に取って代わられた。第三に、現実に大きな問題がある場合、理念の実現がなされることもあれば、理念は大きく後退することもあるということだ。第二世界大戦に際して連合国の四大国になると治外法権撤廃が企図され実現したが、他方で 1969 年にダマンスキー島事件が生じると冷戦下でアメリカへの接近が図られた。他方、個々の時代の連続性、変容については、1895 年前後と 1949 年前後などの節目に注目して考察を行った。基本的に、清末に行省地域と藩部によって形成された「中国」という大枠の維持と統一が、主権という近代概念と相まって「外交」の基礎に添えられている点は、その枠に変化はあるが、清末、民国期、人民共和国期に通底している。また、喪失した国権の回収についても、基本的に通底しているものの、人民共和国期にロシア、ソ連との関係が考慮された点などの変容も見られる。だが、理念と政策との関係性、また時系列的な継続と変容性をアジア外交について見た場合、より慎重な議論が必要なことが理解できた。例えば、冊封・朝貢関係に対す評価は時期によって大きく変動しており、1924 年の孫文の大アジア主義講演では高い評価が与えられたものの、国民政府下では批判的に捉えられ、人民共和国期にも継承されたものの、21 世紀に再び注目されている。また、「反帝国主義」的な論理で中国がアジアの代表であるべきといった理念も、蔣介石政権により提起され、それが形を変えながらも人民共和国期に継承されている。中国のアジア外交を理解する上で、以上のような理解を前提にしつつ、詳細な実証研究を多く蓄積することがまずは課題となるであろう。
　なお、研究遂行の過程で、日本の中国研究者が中国で拘束されたため出張が取りやめになったり、また新型コロナウイルスの影響で招聘・出張ができなかったりしたため、特に最終年度は中国との交流の面で支障があった。中国のアジア外交文献目録については、引き続き目録作成を継続する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計43件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 川島真	４．巻 -
２．論文標題 1950年半ばの中国留日学生と日本国費留学生制度再開	５．発行年 2019年
３．雑誌名 孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東方書店	６．最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Shin Kawashima	４．巻 Volume 26
２．論文標題 Xi Jinping’s Diplomatic Philosophy and Vision for International Order: Continuity and Change from the Hu Jintao Era	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Asia Pacific Review	６．最初と最後の頁 121-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Shin Kawashima	４．巻 -
２．論文標題 Chinese New Terminology: “World Order” and “International Order	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Axel Berkofsky and Giulia Sciorati eds., MAPPING CHINA’S GLOBAL FUTURE Playing Ball or Rocking the Boat?, ISPI Report	６．最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 川島真	４．巻 -
２．論文標題 習近平政権下の外交・世界秩序観と援助―胡錦濤政権期との比較を踏まえて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 川島真・遠藤貢・高原明生・松田康博編著『中国の外交戦略と世界秩序―理念・政策・現地の視線』昭和堂	６．最初と最後の頁 53-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川島真	４．巻 -
２．論文標題 第一章　中国の中華民国史研究―『中華民国専題史』の位置付けについて考える	５．発行年 2019年
３．雑誌名 川島真・中村元哉編著『中華民国研究の動向―中国と日本の中国近代史理解』晃洋書房	６．最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川島真	４．巻 -
２．論文標題 蘇州日本租界開設交渉－荒川巳次・黄遵憲の六条合意（1896年４月）への道程	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大里浩秋・内田青蔵・孫安石編著『東アジアにおける租界研究－その成立と展開』東方書店	６．最初と最後の頁 263-294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡本隆司	４．巻 989
２．論文標題 近代東アジアの「主権」を再検討する――藩属と中国	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史学研究　増刊号	６．最初と最後の頁 186-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 茂木敏夫	４．巻 93
２．論文標題 書評　小野泰教『清末中国の士大夫像の形成』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 現代中国	６．最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 -
2．論文標題 「中国とアジア」研究の特徴ーー『国際政治』誌の視点から	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本国際政治学会 制度整備・自己点検タスクフォース報告書『日本の国際政治学――日本国際政治学会における研究の系譜と特徴』	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 41
2．論文標題 厳しい局面でも、戦略を堅持する中国の対外政策	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日米研究インスティチュート「USJI　Voice」	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 685
2．論文標題 中国の対外政策の構造的変動：「富国外交」から「強国外交」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際問題	6．最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 725
2．論文標題 「強国外交」を進める中国と日本の役割	5．発行年 2019年
3．雑誌名 修親	6．最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Rumi Aoyama	４．巻 11(3)
２．論文標題 Free Trade Leadership and China's Economic Liberalisation	５．発行年 2019年
３．雑誌名 East Asia Forum	６．最初と最後の頁 5-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 青山瑠妙	４．巻 7
２．論文標題 中国国家安全中的脅威認知	５．発行年 2019年
３．雑誌名 欧亜研究	６．最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 青山瑠妙	４．巻 -
２．論文標題 中国と国際秩序	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『現代中国理解の要所――今とこれからのために』21世紀政策研究所	６．最初と最後の頁 135-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 青山瑠妙	４．巻 -
２．論文標題 中国における戦争記憶の構築と日中和解	５．発行年 2020年
３．雑誌名 菅英輝『競合する歴史認識と歴史和解』晃洋書房	６．最初と最後の頁 173-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡本隆司	4．巻 101巻6号
2．論文標題 長崎の聖堂と孔子廟――日中の近世と近代	5．発行年 2018年
3．雑誌名 史林	6．最初と最後の頁 109-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島真	4．巻 22号
2．論文標題 中国の第一次世界大戦参戦――対ドイツ抗議・断交を中心に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東アジア近代史	6．最初と最後の頁 29-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島真	4．巻 －
2．論文標題 日華断交之前日本対台湾海峡的立場和論述――第二次台湾海峡危機時期為主	5．発行年 2018年
3．雑誌名 江柏イ主編『馬祖――戦争与和平島嶼国際学術研討会論文集』連江県政府出版	6．最初と最後の頁 285-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島真	4．巻 615号
2．論文標題 近代中国における『独立』――軍事・安全保障からの視点	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東亜	6．最初と最後の頁 92-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島真	4．巻 —
2．論文標題 一九五〇年代半ばの中国留日学生と日本国費留学制度再開	5．発行年 2019年
3．雑誌名 孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東方書店	6．最初と最後の頁 285-312
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 川島真	4．巻 29号
2．論文標題 時間軸から見る公文書とアカウンタビリティーー公文書作成現場、外交文書の意義、移行期正義	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アーカイブズ学研究	6．最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 —
2．論文標題 中国外交の世界戦略――一帯一路構想と対北朝鮮政策を軸に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 平和政策研究所	6．最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 AOYAMA Rumi	4．巻 —
2．論文標題 Japan-China Ties are tightening	5．発行年 2018年
3．雑誌名 East Asia Forum	6．最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 49
2．論文標題 中朝の「伝統的友好」は復活するか	5．発行年 2018年
3．雑誌名 外交	6．最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 AOYAMA Rumi	4．巻 －
2．論文標題 Japan’s Balancing Act Tours Beijing	5．発行年 2018年
3．雑誌名 East Asia Forum	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 297
2．論文標題 中国への関与政策は失敗したのか――中国と米国、EUそして日本	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日中経協ジャーナル	6．最初と最後の頁 10-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 －
2．論文標題 岐路に立つ対米関係――危機意識高める中国	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Janet e-world http://janet.jw.jiji.com 電子書籍版	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 Vol.3, No.1
2．論文標題 ハイテク冷戦下の日中関係	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本與亜太研究	6．最初と最後の頁 206-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 －
2．論文標題 転換点を迎える中国外交	5．発行年 2019年
3．雑誌名 経団連タイムス	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 －
2．論文標題 中国とアジアーー中国による「関与政策」と影響力の拡大	5．発行年 2018年
3．雑誌名 福田保編『アジアの国際関係――移行期の地域秩序』春風社	6．最初と最後の頁 89-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 －
2．論文標題 習近平政権の対外戦略と世界秩序	5．発行年 2018年
3．雑誌名 21世紀政策研究所新書74 『中国の国際社会におけるプレゼンス』21世紀政策研究所	6．最初と最後の頁 25-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川島真	4．巻 21号
2．論文標題 中国における甲午戦争百二十年史研究	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東アジア近代史	6．最初と最後の頁 56-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 KAWASHIMA Shin	4．巻 Volume 24
2．論文標題 Toward China's “Hub and Spokes” in Southeast Asia? ; Diplomacy during the Hu Jintao and First Xi Jinping Administrations	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Asia Pacific Review	6．最初と最後の頁 64-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1080/13439006.2017.1415565	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島真	4．巻 －
2．論文標題 東亜国際政治史―圍繞中国的国際政治史与中国外交史	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本国際政治学会編、劉星訳『日本国際政治学　第四巻　歴史中的国際政治』（北京大学出版社）	6．最初と最後の頁 66-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島真	4．巻 668号
2．論文標題 中国の対外政策目標と国際秩序観―習近平演説から考える	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国際問題	6．最初と最後の頁 28-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 茂木敏夫	4．巻 別冊第3号
2．論文標題 中国的秩序の理念――その特徴と近現代における問題化	5．発行年 2017年
3．雑誌名 島根県立大学北東アジア研究センター・北東アジア研究	6．最初と最後の頁 75-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 vol.44
2．論文標題 中国・一帯一路構想の広がりその「死角」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 外交	6．最初と最後の頁 73-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 AOYAMA Rumi	4．巻 vol.6 No.2
2．論文標題 Chugoku Seiji Gaiko no Tenkanten: Kaikaku Kaiho to ”Dokuritsujishu no Taigai Seisaku” [China Looks Back: Mao’s Legacy in the Open-Door Era]	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of Contemporary East Asia Studies	6．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1080/24761028.2017.1402512	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 31
2．論文標題 習近平の冒険：新しいガバナンスモデルの模索は成功するのか	5．発行年 2017年
3．雑誌名 USJI Voice	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 AOYAMA Rumi	4．巻 31
2．論文標題 Xi Jinping’s Political Gamble: Searching for a New Governance Model	5．発行年 2017年
3．雑誌名 USJI Voice	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青山瑠妙	4．巻 21
2．論文標題 日本的中国学研究与東亜中国学研究的課題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中国観察	6．最初と最後の頁 60-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡本隆司	4．巻 -
2．論文標題 序論――モリソン、プロファイル、パンフレット	5．発行年 2017年
3．雑誌名 斯波義信・岡本隆司編『改訂増補モリソンパンフレットの世界』東洋文庫叢書80、公益財団法人東洋文庫	6．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計26件（うち招待講演　8件／うち国際学会　15件）

1．発表者名 岡本隆司
2．発表標題 「東方問題」から「朝鮮問題」へ――宗主権をめぐる国際法と翻訳概念
3．学会等名 第18回日韓歴史家会議「国際関係――その歴史的考察」、第2セッション「アジアにおける国際関係への編入」（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 KAWASHIMA Shin
２．発表標題 China at present and BRI
３．学会等名 第2回:日経・CSIS 地政経済学シンポジウム（Nikkei-CSIS, Geo-Economic Strategy Forum（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川島真
２．発表標題 中国の対外政策と秩序形成
３．学会等名 第9回東京ソウルフォーラム
４．発表年 2018年

１．発表者名 川島真
２．発表標題 近代日中関係史のCRITICAL JUNCTURE――21か条要求・満洲事変・日華平和条約
３．学会等名 「20世紀アジアを振り返る――国際関係と国家建設の視点から」日本国際問題研究所主催
４．発表年 2018年

１．発表者名 KAWASHIMA Shin
２．発表標題 Chinese view on trade issue and North Korea Problem
３．学会等名 CTrade Battles, North Korea, and U.S.-Japan China Policy, Carnegie Endowment for International Peace（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 KAWASHIMA Shin
２．発表標題 China’s Nation Building and Critical Junctures of Modern Sino-Japanese Relations
３．学会等名 20世紀アジアの歴史国際共同研究シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 KAWASHIMA Shin
２．発表標題 The Rise of China and its Implications for the World: A View from Japan
３．学会等名 ワークショップ‘EUROPE AND EAST ASIA UNDER THE SHADOW OF AUTHORITARIAN POWERS’（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川島真
２．発表標題 中国の『大国化』と中国近現代史研究の変容
３．学会等名 東洋学・アジア研究連絡協議会 シンポジウム「近未来の東洋学・アジア研究」
４．発表年 2018年

１．発表者名 KAWASHIMA Shin
２．発表標題 China’s Nation Building and Critical Junctures of Modern Sino-Japanese Relations
３．学会等名 Symposium: “Origins of Prosperity and Stability: State Building in 20th Century Asia”（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 KAWASHIMA Shin
２．発表標題 The Rise of China and its Implications for the World: A View from Japan
３．学会等名 Europe and East Asia under the Shadow of Authoritarian Powers: Co-organized and Co-Financed by the Japanese Ministry of Foreign Affairs（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 KAWASHIMA Shin
２．発表標題 Japan : 1972-1990s
３．学会等名 International Workshop "A Comparative Study of Asian Countries' Bilateral Relations with China: An Approach from the Four Factor Model : Identity, people’s emotions and perceptions”（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島真
２．発表標題 作為思想的対華外交：従外交現場審視蔣介石・中華民国・台湾
３．学会等名 “第四届蒋介石与近代中国”国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 KAWASHIMA Shin
２．発表標題 CHINESE PERCEPTIONS OF ASIA AND JAPANESE PAN-ASIANISM IN THE EARLY 20TH CENTURY
３．学会等名 EAJS2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 川島真
２．発表標題 冷戦期中華民国の対外政策と宣伝―尖閣諸島／釣魚台列嶼問題の形成過程における―
３．学会等名 アジア政経学会秋季大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 川島真
２．発表標題 新時代中日関係的展望和課題
３．学会等名 2017年復旦大学日本研究センター第27回年次国際シンポジウム「トランプ政権下のアジア太平洋経済統合と中日協力」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 川島真
２．発表標題 1980年代初中日關係與東亞國際秩序的變動―以日本新公開外交档案為基礎的初步探討―
３．学会等名 戰爭與東亞國際秩序的變動」國際學術研討會（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 KAWASHIMA Shin
２．発表標題 THE FORMATION SENKAKU/DIAOYU DISPUTES AND THE MEDIA'S STANDPOINTS TO BAODIAO MOVEMENT: A CASE STUDY ON PROPAGANDA OF THE KMT GOVERNMENT
３．学会等名 WORKSHOP ON COLD WAR AND KNOWLEDGE IN EAST ASIA（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 茂木敏夫
２．発表標題 普遍と特殊――近現代東アジアにおける秩序構想の語り方
３．学会等名 中央大学政策文化総合研究所公開研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 茂木敏夫
２．発表標題 中国伝統秩序及其現代政治、社会概念――伝統的連続、断絶及20世紀的新面貌
３．学会等名 概念史研究的亜洲転向――中国現代政治社会関鍵概念研討会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 青山瑠妙
２．発表標題 中国と冷戦後の国際秩序
３．学会等名 日本国際政治学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡本隆司
２．発表標題 中国「ギルド」論の系譜
３．学会等名 社会経済史学会第86回全国大会パネル報告「近代中国の経済「制度」のモデル」
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡本隆司
２．発表標題 「近代」の視点を問いなおす
３．学会等名 明清史夏合宿2017シンポジウム「明から清へ――世界秩序観の持続と変容」コメント
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡本隆司
２．発表標題 「大君主」の興亡――近代東アジア国際関係における韓国の独立と君主号
３．学会等名 韓国・日本史學會2017年度日本史學會國際學術大會《日本外交政策の歴史的展開と東アジア國際關係》（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡本隆司
２．発表標題 「白眉」の運命――『モリソンパンフレットの世界』を上梓して
３．学会等名 モリソン文庫渡来100周年記念国際シンポジウム「碩学が語る東洋学の至宝のすべて」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計13件

１．著者名 岡本隆司	４．発行年 2018年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 265＋iv
３．書名 世界史序説――アジア史から一望する	

１．著者名 岡本隆司	４．発行年 2018年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 229
３．書名 近代日本の中国観――石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで	

１．著者名 岡本隆司	４．発行年 2018年
２．出版社 日本経済新聞出版社	５．総ページ数 222
３．書名 歴史で読む中国の不可解	

１．著者名 波多野澄雄・戸部良一・松元崇・庄司潤一郎・川島真	４．発行年 2018年
２．出版社 新潮社	５．総ページ数 288
３．書名 決定版 日中戦争	

１．著者名 河原地英武・平野達志訳著、家近亮子・川島真・岩谷将監修	４．発行年 2018年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 288
３．書名 日中戦争と中ソ関係	

１．著者名 阿南友亮・佐橋亮・小泉悠・クリストファー・ウォーカー・保坂三四郎・マイケル・マッコール・川島真	４．発行年 2018年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 52
３．書名 シャープパワーの脅威	

１．著者名 Shihoko Goto, Rumi Aoyama, Abraham Denmark	４．発行年 2018年
２．出版社 Wilson Center	５．総ページ数 -
３．書名 U.S. National Security Strategy: Implications for the U.S.-Japan Alliance	

１．著者名 Tse-Kang Leng and Rumi Aoyama	４．発行年 2018年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 -
３．書名 Decoding the Rise of China: Taiwanese and Japanese Perspectives	

１．著者名 平岩俊司・川島真・金基正・木村幹・加藤達也・松崎隆司・石丸次郎・山口昇・香田洋二・永岩俊道	４．発行年 2017年
２．出版社 中央公論新社、Kindle版	５．総ページ数 56
３．書名 北朝鮮の暴走、韓国の迷走	

１．著者名 宮本雄二、佐橋亮、川島真、堀本武功	４．発行年 2017年
２．出版社 中央公論新社、Kindle版	５．総ページ数 26
３．書名 習近平の権謀	

１．著者名 益尾知佐子・青山瑠妙・三船恵美・趙宏偉	４．発行年 2017年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 274
３．書名 中国外交史	

１．著者名 岡本隆司	４．発行年 2017年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 312
３．書名 Ｇ・Ｅ・モリソンと近代東アジア――東洋学の形成と東洋文庫の蔵書（コレクション）	

１．著者名 斯波義信・岡本隆司	４．発行年 2017年
２．出版社 東洋文庫	５．総ページ数 455
３．書名 改訂増補モリソンパンフレットの世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

川島真研究室
http://www.kawashimashin.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	茂木　敏夫 (Motegi Toshio) (10239577)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	
研究分担者	青山　瑠妙 (Aoyama Rumi) (20329022)	早稲田大学・国際学術院（アジア太平洋研究科）・教授 (32689)	
研究分担者	岡本　隆司 (Okamoto Takashi) (70260742)	京都府立大学・文学部・教授 (24302)	